
It's a piece of cake

池波創路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

It's a piece of cake

【Nコード】

N0092Z

【作者名】

池波創路

【あらすじ】

どんな依頼でも朝飯前。

困ったことなら、なんでも屋 『Piece of cake』に。

宇宙コロニー”フィガロ”に小さな事務所を構える『Piece of cake』には、毎日様々な依頼が舞い込む。

特殊な能力を持つ、スペシャリスト達がどんな依頼でもスピード解

決
!

プロローグ

” 私たちにかかればどんな依頼も朝飯前です。”

” 宇宙のなんでも屋 『Piece of cake』”

そう書かれたポスターが街の街灯に貼られている。

「いくら何でも屋つていつても、犬の散歩とはね…。」

大きなサングラスをかけた青年は、白と黒の毛色の大型犬、グレーハウンドを連れて街を歩いていた。

「屋敷に戻れば依頼は終わりだ。さっさと終わらせよう。」

青年は、首輪に付けられたリードを引っ張る

が、グレーハウンドは全く動こうとしない。

グレーハウンドはドッグレースに使われていたこともある犬種なのだが、こいつが速く走れるところは想像できない。

「やれやれ…。」

「今戻ったぞ。」

「お帰り、ネイサン。けっこう時間掛かったね。」

椅子に座って雑誌を読む黒髪の女性が言った。

「動物は気まぐれだからな。ソフィーはどうだった？」

「楽勝よ。旦那の浮気現場を押さえて、奥さんに報告して終わり。追加依頼があれば連絡があるわ。」

「ウィルはまだか？確か新設のサーキットからの依頼だったな。」

「今日はウィルが一番遅いかもね。私もサーキット行きたかったな
」。」

「今回の依頼はあいつが一番適任だからな。また今度プライベートで行きなよ。」

ネイサンは、コーヒーを煎れ、ソファに座った。

「中々大きな依頼って来ないもんだな。」

「大きいっていうと、あの事件とぐらい？」

「あれは、依頼じゃないだろ、ただの”人助け”だ。そもそも、この会社できてないだろ。」

ネイサンは深い溜め息を付いて、ソファに寝転がった。

プロローグ（後書き）

感想や意見などがありましたら、気軽に書いていって下さい。

人助け1

西暦 20XX 宇宙旅客船 ”ベリナス” 内

「本日は、宇宙旅客船ベリナス号を御利用頂きまして、誠にありがとうございました。誠にありがとうございます。当船は、リーガルを出発しまして、途中ポースを経由し、目的地フィガロまで航行いたします。船内では、お食事からお飲物まで様々なサービスを提供しておりますので、巡回の乗務員にお申し付け下さい。」

女性乗務員のアナウンスが船内に響く。

「すみません。そこは、私の席だと思っておりますが。」

レザーのブルゾンを羽織り、大きめのサングラスを掛けた長身の青年が窓際に座る女性に声を掛けた。右手には、銀色のアタッシュケースを手にはしている。

「えっ。ここはA - 23の席でしょ?」

声を掛けられた女性は自分の旅客船チケットを取り出し、座席に書かれた番号を見比べた。

「窓際がB - 23になるので、通路側がA - 23ですね。」

サングラスの青年は自分の旅客船チケットを女性に見せた。

「ほんとだ。すみません、気づかなくて。」

女性は浮き上がり防止用のベルトを外し、席から立ち上がるうとしたが、サングラスの青年は、女性に手で座るよう合図を送った。

「そのまま構いませんよ。私が通路側に座りますので。」

「いいんですか？間違えたのは私なのに、申し訳ないです…。」

「いいんですよ。気にしないでください。」

笑みをみせたサングラスの青年は、座席上の棚にアタッシュケースを置き、荷物が飛んでいかないように、棚に備え付けられたベルトをケースに巻いて、座席に腰を下ろした。

（座席は、窓際か通路側しかないんだから普通間違えないだろ。せっかく窓からリーガルを最後に見ようと思ってたのに。）

「見栄張っちゃって。」

女性は、窓から景色を眺めながらボソツと呟いた。

「今、何か言いました？」

「い、いえ何も言ってますんよ。あははー。」

女性は、笑って自分の言動をごまかした。

「気のせいかな…。あなたは観光ですか？」

「いえ、私はリーガルに用事があって、その用事が終わったので、

これから国に帰るところです。」

「そうでしたか。あ、まだ名乗っていませんでしたね。私はネイサンです。リーガルには旅行で来て、これから帰るところです。」

(旅行ねえ…。)

「私はソフィーです。よろしく。」

ソフィーはネイサンと年齢があまり離れていないようだったが、目鼻立ちがはつきりした顔立ちと、肩まで伸びた艶のある綺麗な黒髪が、大人の女性の雰囲気醸し出している。

ネイサンとソフィーは初対面とは思えないほど打ち解け、会話が弾んだ。

ネイサンはソフィーが時々、何か考えるような表情を見せたり、通路を挟んで向こう側に座っている男性の方を気にしているのが、気になったが、船内アナウンスが始まったため、そちらに集中した。

「まもなく、ポースに到着致します。席をお立ちのお客様は座席にお戻りになるようお願い致します。」

「もうすぐ、ポースね。」

ソフィーは大きな伸びをして、外の景色を眺めていた。

「思ったより早く感じたな。ソフィーと色々話が盛り上がったからかな？なんていうか、ソフィーは話題の振り方がうまいなあ。ラジオのMCなんかむいてるんじゃないか？」

「あははは。そ、そうかな？考えとく。」

暫く2人の間には会話がなくなつたが、ソフィーは鞆の中の携帯を見てから、再び話し始めた。

「それにしても遅いなあ。そんなに下りる人が多いのかな？」

「確かに、もう30分以上停船してるな。何か船に問題があつたのかな？」

（正確には32分28秒。確かに普段の同じ航路なら、だいたい15分くらいで出発するな。）

ソフィーは通路の向こう側に座っている男性の方を見つめ、驚いた顔をしている。

「普段は15分くらいで出発するようだけど…。何かあつたのかもしれないわね。」

「こりゃ、家に帰るのがかなり遅くなりそうだ。」

ネイサンは左手にした腕時計を見ながら溜め息をついた。

船内アナウンスのチャイムが鳴り、先ほどとは違う男性の声でアナウンスが始まった。

「ただ今、旅客船ベリナス号は私達が占拠しました。暫くの間、座席を立たないようお願い致します。もし、私達の指示に従わないものは、こうなりますのでご注意ください。」

「な、何する気だ！や、やめ…。」

アナウンスの向こうから、一発の銃声が響き、静かになった。

「キヤーツ！」

座席の乗客の一人の女性が悲鳴を上げた。

周りの乗客達も不安な顔を浮かべ、ザワつきだした。

アナウンスが終わると同時に、ライフル銃を持ち、武装した男が船内に入って来た。

ザワザワしている乗客を目の前にして、武装した男が、ハンドガンを取り出し、天井に向けて空砲を一発放った。

さっきまでのザワつきが嘘のように、船内はシーンと静かになった。

人助け1（後書き）

感想や意見などがありましたら、気軽に書いていって下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0092z/>

It's a piece of cake

2011年11月30日19時01分発行